
Logger -砂の城址

lowpoint

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Logger - 砂の城址

【Nコード】

N2721T

【作者名】

lowpoint

【あらすじ】

何百年も前に俺らのご先祖様たちは文明の滅びを自覚した。

その時代に生きた人々は何とかがして自分たちの記録を残そうと、

世界中に何万、何百万と狂ったように「logger」を設置した。

そして現在。

俺は親父の形見「コンゴウ」と地下の穴蔵で暮らす貧乏学生。

その一方で、残された記録装置を漁り、有用なデータを吸い出しては

ターミナルで売りさばく「ロジャーズ」の下っ端だ。

「あーあ。どっか行きてえなあー」

椅子の上で思いつきり伸びをすると、安い背もたれと首の骨が同じようにばきばきと音をたてた。

学校に提出する三本目のレポートはまだ白紙。けど、二本目までは期限内に提出できてるんだから、今回も何とかお目こぼししてもらえらるだろう。

そろそろバイトを入れないと生活がきつい。特にコンゴウ、お前のエサ代がかさむんだ。

伸びをしてひっくり返った視界に、あざやかな山吹色の羽毛に包まれたそいつの尻が見えた。止まり木の上でさも窮屈そうに片方ずつ翼を広げ、ぶるつと腰を震わせる。俺がむつつりと見上げてるのは先刻ご承知だ。

「クソすんなよ、おい」

わざと嫌そうに言い放つのも、これ見よがしに尻を振りやがるのも、互いのストレス発散法なのだ。けれどそれも限界が近い。もう三日もこの穴蔵から出ちゃいない。太陽光集積器経由じゃない、ナマの日の光を全身に浴びたい。吹く風の匂いを嗅ぎたい。そんなことを口にする周囲の連中は必ず「ありえねー」「信じられなーい」って顔をする。けれど俺は突っ張ってる訳じゃなく、本心からそう願ってるんだ。

とりあえず学校へ顔を出してみよう。レポートの件は学務課の担当に情けない声ですがりついて、それから学食で昼メシ食って、適当なバイトでも探すことにしよう。

叩きつけるようにペンを置くと、驚いたコンゴウが首を伸ばして

ぎよえつと鳴いた。

「学校、行ってくるわ」

「ガッコ、レポート。レポート、オワンネー」

「うっせーな。まだいいんだよ」

「イインカヨ。レポート。レポート」

いつもの甲高い罵声に見送られ、俺はプライベートルームを後にした。穴蔵からトンネル経由でターミナルへ。三段下がって二段上がる。どこまで行っても穴蔵ばかりだ。確かにここは安全で、人恋しい時にはありがたい。けど、今はどうにもうんざりだ。

仏頂面のまま学校に着いた俺は、学務課のオバサンを拝み倒し、スリーA定食を五分でかつ込むと、ロジャーズの案配屋を探してグリーンコート裏へ向かった。

いつもの場所に彼女はいた。俺はお上品にベンチに腰掛けている彼女に近づくと、ぱんぱんとジャケットの前を払って注意をひきつけた。

「レポート、終わったのね」

「……まあ、一応」

信じているのかとぼけてるのが、ミス・タガミは黒髪のポニーテールを揺らしてうんうんと何度も頷いた。紺色の地味なワンピース、急角度の胸の上で銀のペンダントも一緒に揺れた。

「学生は学業がなにより、だもんね」

「ははは…当然っスよ」

いつかまっとうな仕事にありついたら、この年上の女性を颯爽とダイナーに誘うのが俺の夢のひとつだ。小柄で童顔で、笑っても怒っても黒目のうるっとしたところが何とも可愛い。「学校に来るんだから、もっと若い格好していいんじゃないっスか？ ポニーテールとか似合いそうだし」って俺が勧めたら、次からきっちりポニーテールで来るところなんかものすごく可愛い。何より声が最高に可愛い。頑張れ、俺。明るい未来はすぐそこだ。

「ひとつ、緊急の仕事があるんだけど」

「ぜひ。ぜひ」

「レポート提出が終わってるなら、お願いしても大丈夫、よね…？」
「もちろん、大丈夫」

そして俺は外へ出た。

アンドウ・タクミ、十九歳。ロジャーズ登録番号J P O M 8 1 7
72。バックアップは極東Cチエイン。お供は毎度のインコが一羽。
今回のログ漁りは南の無人島で、だとさ。リゾートで宝探し
とは、なかなかいいご身分じゃないか。俺は意気揚々と穴蔵を後に
南の島へと旅立った。

知ってるか。鳥も船酔いするんだって。

俺はコンゴウとは長いつきあいだから半端なことじゃ驚かない。けれど無人島のツアークルーは俺の膝の上でぐったりしちまった鳥に驚いてクルーザーの操舵を放り出してしまった。

「大丈夫なのかい、本当に」

「ええ、もう。全然平気っス」

はらはらするのはあんたより客のこっちだ。頼むから舵を取ってくれ。

「人間とおんなじですよ。陸に上がってしばらく休めば元通りになるんで」

島に着くまでのどたばたで、俺の中でクルーの評価は確実に二段階下がった。けれど、細い水路をくぐり抜け朽ち果てた棧橋にきつちりと船を着けた操船術には舌を巻いた。これだから外は面白い。穴蔵にこもってたんじゃ、きつと一生かかってもこの凄さは理解できないだろう。

「毎日のようにやってるからね」

手放しでほめあげる俺にむかって少し照れくさそうに男は笑った。そんな顔を見せられると少しだけ心が痛む。もしかしたら、俺がこれからログを漁ることで、この人の仕事を取り上げることになるかもしれない。そうでないことを祈る。俺は鋼鉄の心臓をもってる訳じゃないんだ。

下っ端のロジャーズである俺に仕事の全貌が知らされることはまれだ。今回の仕事は、この島のロガーから「ミズノ・トキエ」に関する情報を引つ張り出すことだ。「その人物がある日ある時、その島にいたことを証明するデータが欲しい」というのが俺に知らされた依頼の内容だ。推測をたくましくするならば、ミズノ何とかの子孫が島の占有権を主張したがっている、なんてことも考えられる。

……まあ、滅多にないことだとは思っけれど。

「本当に、案内はいらぬのか？」

「男ひとりっすから。このパンフだけもらっていきますね」

普段は限定三組のカップル御用達ツアーコースだという。今日は大潮で、四つのチェックポイントのうち二つに立ち寄ることができない。そのせいで本来のエントリーは一組も無く、無理やり船を出してもらったためには四人分のツアー料金を払わなくてはならなかった。そんな俺を気の毒に思ったのか、クルーは一生懸命に世話をやこうとしてくれる。

「これ、ランチとドリンク。…二人分だからちよつと多いけど、若いからいいよね」

「ああ、はい。すみません」

「そこに書いてあるけど、安全確認のためにレスポンスが二時間後に必ず起動するから。一度だけ」

「わかりました。どうもです」

片手にピンクの包みのランチパックを下げ、反対の腕にコンゴウを抱え、首から緊急連絡用のレスポンスをぶら下げて、俺はひとり南の小島に上陸した。

ねっとりとした風に背を押されて狭い浜を越える。続く急斜面はむせかえるほどに緑濃い熱帯のジャングルだ。けれど所詮はツアー用に開拓されている小島だ。細く曲がりくねった小径は平らなサンゴで補強されているし、脇には矢印のついた看板がいくつもの見え隠れしている。風雨に色褪せた文字で書かれているのは…「果ての浜」「恋人岬」「神秘の洞窟（夜間立ち入り禁止）」。どれもこれも、口にするのが恥ずかしいような名前ばかりだ。

俺はなるべくコンゴウの軀を揺らさないようにして、まずは島を横切って「果ての浜」とやらに向かった。どうせ大した道のりじゃない。案の定、三十分もしないで反対側の浜に出た。廃屋を模した休憩所。どう、と盛大にとどろく波の音。波打ち際には木造のボートがぼつんと一艘乗り上げていて、それっぽい風情をかもしだしている。いいんじゃない、恋人と来るんだったら。

乾いた砂地にどっかりと腰を下ろし、吹き出る汗を手の甲で拭う。穴蔵では見え透いたポーズにしかないが、ここでは違う。外なのだ。俺は今、世界の姿を垣間見ているんだ。

高揚が伝わったのか、コンゴウの両足が俺の膝頭をぐんと掴み上げる。確かめるように翼を広げ、ずしりと重い蹴りをかましてぎこちなく舞い上がる。

「どうだ、もう大丈夫か」

我が家のペーパードライバーは飛行中に口がきけない。行って戻って、差し出した俺の腕ではなく頭に降り立つや、ぎゃあぎゃああと鳴きわめいた。

「ダイジョウブか。ダイジョウブか」

「うっせー。こらこら…痛えよ。やめろ、バカ。ハゲたらどうすんだ」

「ハゲ。ハゲ。ハゲー」

「だーかーら。やめろって」

十一歳の俺を残して死んじまった親父はハゲじゃなかった。けど安心はできない。親父、まだハゲる年齢でもなかったろうしな。

俺に余計な心配をさせるバカ鳥を拳で黙らせ、餌と水で懐柔する。奴が大人しくしてるほんの僅かの時間に、先ほど船でもらったパンフレットと自前のマップをつき合わせる。知られている限り、ロガーは島に二つ。一つはこのあたりだ。もう一つは洞窟の入り口だ。そっちはパンフレットの写真に写り込んでるから間違いない。

「こいつか」

五十メートル四方程度の斜面をぐるぐる回っているうちに、最初のロガーにぶち当たった。

うんざりするほどこいつらを見ている、なんて口に出して言うのもバカらしい。

今の俺たちは、この膨大なロガーの上に　いや、下にか　新たな文明の絨毯を敷いてひっそりと生きているのだ。　新

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2721t/>

Logger -砂の城址

2011年10月9日02時58分発行